

意味の無意味、無意味の意味

株式会社 野村総合研究所

アーバンイノベーションコンサルティング部長 若菜 高博

先日、横浜トリエンナーレのイベントで横浜美術館を訪れ「野草：いま、ここで生きてる」をテーマに展開される現代アートを鑑賞した。現代アートは難しく、作品そのものを楽しむというより、作品の脇に掲示されている解説を読み込み、作品と見比べながら、その意味を読み解こうともがくことになった。その結果、作品を見て「自分がどう感じるか」よりも、解説を読んで「作者が何を伝えたいと考えているか」を理解することに傾注してしまっていた。せつかくの解説（意味づけ）も、私が理解できなければ無意味なものになってしまう。意味をしっかりと腹落ちするためにも、私自身が作品をどう感じるかを大切にしなければならないと感じた。

そこからさらに思考を巡らせ、経営マネジメントにおいて、マネージャによる意味づけや意義づけが、ますます重要になってきていることに思いをはせる。MVV（ミッション・ビジョン・バリュー）経営は、組織の存在意義や目指す方向性と、そこで働く人たちの働くモチベーションのベクトル合わせを、双方向にコミュニケーションし、明確に言語化しながら進めていくものだ。日本企業が得意のミドルアップダウン経営では、ミドル層がMVVに意味づけをして組織内に伝達する役割を担う。

翻って、わが身を振り返る。自分が若かりしころ、そのような他者からの意味づけが私にとってどれだけ意味があったのかを。恐らくそのような機会は、無意識の中で数多くあったのだと思うが、自分が最前線で業務にいそんでいたときに、ミドル層からの意味づけをあまり意識していなかった。楽しい仕事であれ、苦しい仕事であれ、意味や意義などを考える余地なく、無我夢中に仕事をこなしていた。良く解釈すると、我武者羅ながら主体性を持ってまず何でもやってみることで、その体感・経験から、明確に言語化していない「何か」を学んでいたのだと思う。つまり、「我武者羅」「何でもやってみる」というのは、一見無意味な行動に思えるが、私にとっては確実に自分の血肉となり、有意義な意味のある経験になったと感じている。

そう考えると、目の前の作品や仕事について、意味を意識しながら向き合う時間も、意識せずとにかく没頭する時間も、どちらも大切な経験なのだ。幸福な経験や不条理な事態など、さまざまな局面にさらされる中で「いま、ここで生きてる」ことに主体的に取り組み、どんなことからでも学ぶ気持ちがあれば、時間差こそあれ、意味や意義は必ずついてくる。トリエンナーレの「鏡との対話」という章の空間に立ち、改めてそう思わされたのだった。